

143

2023 WINTER

美術館NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 14

中山巍《窓辺肖像》(部分)
昭和4(1929)年
油彩・カンヴァス
90.9 × 72.7 cm

展示されたマンガ、美術館におけるマンガ

洪 性孝(学芸員)



当館では今冬、特別展『^{きめつ やいば ごとうけいよはる}鬼滅の刃』吾峠呼世晴原画展』(以下「鬼滅展」)を開催する。『鬼滅の刃』とは吾峠呼世晴によるマンガ作品で、大正時代の日本を舞台に鬼と戦う主人公を描き、「週刊少年ジャンプ」にて2016年より2020年まで連載された。単行本の発行部数は1億5000万部(電子書籍を含む)を超え、2020年に公開されたアニメ映画は日本の歴代興行収入記録を更新するなど、まさに社会現象と呼ぶべきブームを巻き起こした。普段あまりマンガは読まないが、友人や家族の影響で本作には目を通した、という人も多いかと思われる。鬼滅展はそんな『鬼滅の刃』から約380点の直筆原画を選び展示する原画展である。

さて、鬼滅展のようにマンガを取り扱った展示を美術館で開催することは近年珍しくないが、果たして「マンガの展示」とは、絵画や彫刻の展示と同じように考えても良いのだろうか。もちろんそこにはマンガを美術の俎上に載せる際によく言われるような、文化の^{ハイ}高尚と^{ポップ}大衆という対比も存在するだろうが、ここで述べたいのは、マンガというメディアの特性が展示に及ぼす影響、つまり「マンガそのもの」をいかにして展示するか、についてである。本稿では、鬼滅展での実際の取組みを踏まえながら、美術館におけるマンガの展示というものについて簡単に触れたい。ちなみに本稿で扱う「マンガ」とは、絵に言葉を組み合わせたものや風刺画というよりは、連続したコマ割りによって物語を展開させるストーリー・マンガを念頭に置く。

美術館や博物館といったミュージアムの展示に足を運ぶ際、おそらく鑑賞者が最も期待するのは、普段目にする事のない特別な何かを観ることができるという体験であり、それは展示内容のジャンルを問わない。そしてそこで重要となるのは、展示されているものの希少性やオリジナリティ、所謂アウラである。もちろん例外はあるが、ミュージアムにおける鑑賞という体験は、この本物の作品とそれが持つアウラを前提としたうえで成り立ってきた。

ではその一方で、マンガにおける「本物」とは何か。マンガとは出版による複製を前提としたメディアであり、完成した作品は書店等で誰もが手に入れることができる。その意味では「本物のマンガ」を展示しても、それが現代では極めて入手の難しい年代物の作品などではない限り、絵画や彫刻のような美術作品と同等のアウラを持つことは難しいだろう。そこで用いられるのが「原画」の展示である。原画に残る修正の跡や指示書きといった、完成された作品には不要な手作業の痕跡が、その制作工程の一回性を現出させることで作品にアウラを与えるのである。

しかしでは原画を並べればマンガの展示として十分かと言うと、決してそうはならない。なぜならば、マンガとは「見る」のではなく「読む」ためのメディアであり、またその体験が極めてパーソナルなためである。マンガは手で持って頁をめくりながら読むものであり、そのため表現技法や物理的な形式が最適化され、進化してきた。つまり絵画展示のような、壁に垂直に掛けられ、離れ

た距離から複数人で一点一点じっくりと鑑賞される展示方法に不向きなのである。さらにマンガの大きな魅力である、物語を読み進めることで得られる感動が、絵画などの美術作品による視覚的な感動とまったく異なっている点も重要となる。例えばマンガでは、物語を「読む」ことに没頭するあまり、コマの細部や技量の良し悪しが意識の外に追いやられるといった体験が誰しもあるだろう。逆に美術作品を「見る」場合は、特定のテーマで企画された展覧会でも、その企画意図を見逃すほどに作品の美的な視覚体験に惹きつけられてしまうことは少なくない。マンガの原画を展示室の壁面に展示することは、前述したように作品にアウラを付与し、また美的な視覚体験をもたらすことはできるが、同時にマンガの物語的なシークエンスを断絶させるため、作品が大衆の下にあった時には備えていた感動を損なわせてしまうのである。

このように、マンガの展示を考える時、美術館然とした展示方法のみでは作品の魅力を伝えるには不十分なことがわかる。しかしこれは一方で、マンガと美術館の見方というものに再考を促し、それぞれの視覚体験の境界意識を問い直す機会とも言えるだろう。

では鬼滅展においては、マンガの展示に対してどのようなアプローチがなされているだろうか。この展覧会の最大の特徴は、一つの完結した作品のみを取り扱っているという点である。そのため主人公、味方、敵といった登場キャラクターに章を設けて紹介することができ、作品世界への理解を作り上げたいうで、クライマックスとなる終盤の戦いの場面では、物語がそのまま追えるほどの

量の原画を展示している。また展示室内の壁面には、作品内の一部分などが拡大して並べられ、立体的な造作も数多く取り付けられている。こういった演出が可能なのは複製メディアとしてのマンガの利点であり、また展示室内に視覚的な連続性を生み出し、美術館的なスケールで物語を「読む」ことを可能にしている。

もちろんこれらの工夫によって鬼滅展がマンガの展示として完成しているというわけではなく、課題も残っている。壁面の制限によって、すべての順路が右から左へと読み進められるようにはなっていないし、また近年に大きな話題となった作品単体の展示、という側面が強いため、展示作品を通じて作家性を感じるような純粋な視覚体験は却って難しくなっているかもしれない。これらの点は今後のさまざまなマンガ展において検討・改善されていくだろう。さておき「見る」と「読む」ことの境界を探るような、美術館とマンガの現在地を楽しんでいただければ幸いである。

参考文献:

- ・ジャクリヌ・ベルント「展示されるマンガ―美術館におけるマンガの「美学」」『マンガ美研―マンガの美／学的な次元への接近』ジャクリヌ・ベルント(編)、醍醐書房、2002
- ・表智之・金澤韻・村田麻里子『マンガとミュージアムが出会うとき』臨川書店、2009
- ・成相肇「マンガの展示に関する諸問題」『マンガメディア文化論―フレームを越えて生きる方法』鈴木雅雄・中田健太郎(編)、水声社、2022

【特別展】

「『鬼滅の刃』吾峠呼世晴原画展」

(会期:2023年12月15日~2024年2月18日)



1. 『鬼滅の刃』吾峠呼世晴原画展キービジュアル ©吾峠呼世晴/集英社
2. 「鬼滅展」大阪会場の展示風景 ©吾峠呼世晴/集英社

「(収蔵品特集)中山巍」について

廣瀬 就久(主任学芸員)



(左)図1:《男の全身》(上)図2:《鳥を飼う室内》
いずれも油彩・カンヴァス、岡山県立美術館蔵

中山巍^{たかし}(1893-1978)は岡山市に生まれました。1914年に東京美術学校西洋画科に入学します。在学中、1919年の第1回帝展に《樵夫》が初入選しました。1921年に卒業後、同校研究科に進みます。1922年に同科を修了したのち渡仏しました。パリでは里見勝蔵ら同校以来の友人たちと交友しながら、ヴラマンク、シャガールと接して感化を受けました。1928年に帰国後、滞欧作を二科展で発表します。1930年に独立美術協会を創設して、生涯この協会で活動しました。

当館では1999年に中山の個展を開催しています。以後ご遺族などから寄贈があり、このうち8点の作品を修復しました。ご寄贈作品の場合、修復や額装が必要である場合もあり、作品の展示まで時間がかかることもあります。当館の修復予算には限りがあるため、2001年度から2017年度まで順を追って作品を修復しました。本展では8点すべてを初めて同時に紹介します。

現在所蔵品は69点です。新規修復作品を中心にとすると、滞欧中の《男の全身》(1924、図1)[2016年度修復]、また帰国後に制作した《窓辺肖像》(1929、表紙)、《室内》(1929)[2010年度修復]、《座婦》(1929)[2012年度修復]および《婦人の休日(有閑女人図)》(1930)、《海浜》(1931)[2010年度修復]、《日曜画家と静物》(1932)[2001年度修復]、そして戦後の《鳥を飼う室内》(1964、図2)などが挙げられます。

1922年から28年までの滞欧期では、《パリ淡雪》(1922/後年加筆)などの風景画のほか、室内にいる人物像を多く制作しました。《男の全身》、《縞のエプロン》(c.1927)など男女の単身像や、《家族》(1925)など家族像です。《ヴィオロニスト》(1926/後年加筆)のように、人物は椅子に座り、静物や窓外の風景が描かれる作品もあります。

帰国後は、ヨーロッパとは異なる日本の風土のなかで画業に取り組みました。1928年から32年までの作品は、中山の意欲作として興味深いです。《窓辺肖像》では着物姿の日本人女性を、《海浜》では水泳を楽しむ若者を、そして《日曜画家と静物》では和式の住宅で油絵を制作する自画像を取り上げました。

戦後は、《金魚鉢のある静物》(1950)から《南苑のベランダ》(1968)までの静物画に着目します。静物の題材はさまざまです。《夜の窓辺の花》(1956、寄託品)には暗夜を思わせる黒い空間が、そして《緑の窓辺》(1961)には外からの明るい斜光が印象的ですが、窓外の具体的な風景はほとんど描いていません。《金魚鉢のある静物》と《MOZARTのある室内》(1963)には自画像を、《アトリエ》(1949)には裸婦を、《愛好家》(1955)と《鳥を飼う室内》、《南苑のベランダ》には女性像を加えています。

中山は生誕130年です。50点あまりの収蔵品(所蔵品と寄託品)を選んだうえで、滞欧期から戦後に至るまでの画業を、帰国後間もない頃の作品を中心に振り返ります。

【岡山の美術】「収蔵品特集 中山巍」(会期:2023年12月15日~2024年2月18日)

内なる日常—feel the pulse

I氏賞受賞作家展後記

古川 文子(学芸員)

当館では、岡山県新進美術家育成「I氏賞」の受賞者による展覧会を、2010年から開催しています。今年は11月11日から12月10日までの会期で、2019年度(第13回)と2020年度(第14回)に「I氏賞」大賞を受賞した平子雄一と工藤あゆみの作品をご紹介します。

植物や自然と人間との共存関係をテーマに制作を続ける平子雄一は、500号の大作《Lost in Thought 109》を含む絵画作品と、木材を彫刻し彩色した立体作品によるインスタレーション《Wooden Wood 47》などにより、カラフルでスケールの大きな空間を展開しました。絵と文章からなる作品で繊細な感覚を示す工藤あゆみは、初期の代表作である《はかれないものをはかる》シリーズ、コロナ禍でロックダウンとなったイタリアでの日々を綴った《IO REST A CASA(I stay home)》シリーズの作品群と、本展の準備のため日本に帰国した11月の16日間の新聞紙面を題材にした最新作《Because,it's my news.》を出品しました。

スケールも表現手法も異なる二人の作品に共通して言えるのは、独自のモチーフやイメージによる世界観と、今この時代を生きているという実感とが、しっかりと結びついていることでしょう。初日のアーティストトークでは、それぞれの作品の主題や繰り返し登場する人物(キャラクター)に対する作者自身の思いを聴くことができました。また、制作者ならではの視点から、互いの制作スタイルについて、意見を交わす場面も見られました。

ご存知のとおり「I氏賞」は、岡山県にゆかりのある若い美術作家を支援する事業です。受賞の数年後に当館で開催する「受賞作家展」で、同時代を生きる彼らのさらなる展開をご覧いただくことも、本賞の特色となっています。今回はともに県出身で、それぞれ東京とイタリアを拠点に、国際的な活躍を見せる作家たちの作品を、岡山の皆さまにお楽しみいただく機会にもなりました。

昨年度より賞の選考が2年毎に変更となり、このほど第16回「I氏賞」の一次選考通過者11名が発表されたところです。年明けの選考作品展において、実作品による最終選考が行われ、また新たな受賞者が生まれます。若い感性による表現が集う場を、この機会にぜひ体感してみてください。



1. 平子雄一《Green Master 82》2023
2. 工藤あゆみ《IO RESTO A CASA(I stay home)》シリーズより「今を保存する。いつか一緒に味わうために。」2020
- 3-4. 第十三回 I 氏賞受賞作家展(会期:2023年11月11日~12月10日)展示風景
- 1-3はいずれも ©Yuichi Hirako courtesy of KOTARO NUKAGA, photo by Osamu Sakamoto

【展覧会情報】「第16回 I 氏賞選考作品展」(会場:岡山県天神山文化プラザ 会期:2024年1月16日~28日)

新収蔵品紹介

File 25

備前混淆土花器
 隠崎隆一

福富 幸(学芸課長)



《備前混淆土花器》2022 備前混淆土 高さ58cm

隠崎隆一(昭和25(1950)年生)は長崎県福江市に生まれ、大阪芸術大学デザイン学科を卒業後、デザイン会社に就職しましたが、飽き足らず、縁あって1976年備前市伊部にやってきました。最初、岩本修一に学び、備前陶芸センターで研修を受け、その後、伊勢崎淳に師事し研鑽を積みました。一水会陶芸展や日本工芸会中国支部展、朝日陶芸展等に入選、1985年瀬戸内市長船町に登り窯を築いて独立しました。デザインセンスに優れ、それまでの備前焼には見られなかった斬新な造形作品は早くから人気を集め、1995年度には日本陶磁協会賞を受賞。いささか閉鎖的な備前にあっては県外者の華々しい活躍を良しとせず、煮え湯を飲まされるようなこともあったそうですが、時には逆風にも耐えながら自身の制作に邁進し、2009年金重陶陽賞、2015年毎日芸術賞など受賞を重ね、現代備前の第一人者のひとりとして押しも押されもしない作家となりました。

隠崎は形をつくる、造形デザインに腐心するとともに、形をつくるための焼き物の根幹である陶土の研究にも力を注ぎました。いわゆる良質の土を入手することが難しい県外者の事情を逆手にとったようなものですが、選りすぐられた後に捨てられるようなくず土に着目し、その活用を模索、混淆土と名付け発表してきました。そしてついに2022年第69回日本伝統工芸展において、一見備前焼らしからぬ白い作品が文部大臣賞を受賞。この受賞によって混淆土もまた備前焼であると公認されたようなもので、隠崎の積年の苦勞が報われたと言えるでしょう。本作品は受賞作と同時期に制作されたもので、器表面に見られる緋色の変化は伝統的な備前焼のイメージを残しつつ、混淆土の独特な肌合いを見せています。備前焼の伝統を受け継ぎ、さらに新しい表現を模索する隠崎の作陶のひとつの到達点を示す作品です。

展覧会スケジュール

1月
January

12月15日|金|-2024年2月18日|日|

【特別展】

『鬼滅の刃』吾峠呼世晴原画展

「週刊少年ジャンプ」2016年11号より連載が開始された、漫画家・吾峠呼世晴氏による『鬼滅の刃』。主人公・竈門炭治郎を中心に、人と鬼とが紡いだ切ない物語は鬼気迫る剣戟、時折コミカルに描かれるキャラクターたちが人気を呼び、コミックス全23巻で累計発行部数が1億5000万部を突破(電子版含む)。本展覧会では吾峠呼世晴氏の想いの詰まった直筆原画を多数展示し、連載終了後も注目を集める本作の魅力、世界観を余すことなく伝える。

*最新情報は岡山県立美術館HPをご確認ください。
<https://okayama-kenbi.info>

2024年1月13日|土| 14:00-15:30

記念講演会 「マンガをいかに展示するか？」

講師 成合肇氏(美術評論家・東京国立近代美術館主任研究員)

会場 2階ホール(当日先着220名) ※要観覧券

1月27日|土| 18:00-18:30

美術の夕べ 「『鬼滅の刃』吾峠呼世晴原画展をみる」

講師 洪性孝(学芸員)

会場 地下1階展示室 ※要観覧券

2月12日|月・振休| 14:00-14:30

F L 「中山巍展フロアレクチャー」

講師 廣瀬就久(主任学芸員)

会場 2階展示室 ※要観覧券

2月
February

12月15日|金|-2024年2月18日|日|

【岡山の美術展】

収蔵品特集 中山巍展

2月25日|日|-3月10日|日|

【教育普及展】

第5回 みんなの参観日

「図工の時間・美術の時間—子どもの学び—」

3月
March

2月27日|火|-4月7日|日|

【特別展】

走泥社再考 前衛陶芸が生まれた時代

1948年に八木一夫、叶哲夫、山田光、松井美介、鈴木治の5人で結成された走泥社は、会員の入れ替わりを経ながら50年間にわたり日本の陶芸界を牽引してきました。特にその重要性は前半期にあり、本展では走泥社結成25年となる1973年までを主たる対象とし、走泥社と同時期に前衛陶芸運動を展開した四耕会の作品なども合わせて展示し、日本の前衛陶芸が確立していくうえで中心的な役割を果たした走泥社の活動の意味を再検証するものです。



収蔵品の紹介 Vol. 14

中山巍《窓辺肖像》

昭和4(1929)年 油彩・カンヴァス 90.9×72.7cm

着物姿の日本人女性。明るい外景と暗い室内が対照的です。着物は濃青色。半襟は淡紅色で帯は補色の緑色。眉と目、鼻、口を丹念に描きます。右下から光を当てました。肌の色には明暗差があり、全体の顔は立体的に見えます。フランスから帰国した翌年の制作。日本人らしい独自の油絵を追求した意欲作です。(廣瀬)

「ひっつき虫」

守安 収

酷暑の夏があわただしく去ると、今度は暖房器具が欲しい時節となりました。そこで一念発起し、これまで暑さを言い訳に放置していた庭の草むしりに取り掛かった次第。敷地にススキが生い茂って月見にびったりというのはいかがなものか、セイタカアワダチソウが私の背より高いというのは何事か、と自嘲しながらの一仕事。すると作業服には小さな緑色の三画形がびっしり貼りついています。その正体はヌスビトハギ(盗人萩)。ひっつき虫という通称の方がまだましな呼び方ですね。そのまま洗濯籠に入れるわけにもいかず、30分ほどせっせと剥ぎ取りました。▼それでは美術家にひっつき虫のように学芸員が密着すると、どうなるのでしょうか？いつも傍にいと制作に集中できないからと追い出されてしまう可能性が大。それでも作家さんについて語ったり執筆するとなると、密着取材したいのが学芸員の性。作家さんとの間合いを上手にとってワンチームとなることができたなら、充実した展覧会が創出されるはず。私のような古美術系の学芸員は、対象作家が物故者であるため、所蔵者らとの関係性に留意することでほぼ何とかできますが、何が飛び出すかわからない現代作家やその周辺の方々と交渉しながらマネジメントする仲間は尊敬する他ありません。▼11月になって、I氏賞作家の大賞展が始まりましたが、これは受賞作品の展示ではなく、受賞後数年間を経た作家の進化の軌跡を披歴する試みです。こうした育成、支援を重視するI氏賞の枠組みは、賞金を贈呈して完結する事業とは異なります。おかげさまで受賞作家と岡山との絆は強固となり、皆さんさまざまな形で地域に美術の種を蒔いてくださっています。



岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩約3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ
・循環バスめぐりん 益野線「表町入口」下車徒歩約3分

開館時間 9:00—17:00 (入場は閉館時間30分前まで)
夜間開館日は19:00閉館

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

中西ひかる

前号の編集後記を書いていた頃は、まだ秋の気配もないような暑さが続いていましたが、何やら突然寒くなってしまい、気づけば冬服を慌てて引っ張り出していました。そんな時間が一気に流れていくような感覚に振り回されているこの頃ですが、12月中旬から2階展示室にて始まった「中山巍展」とともに、同会場にて「岡山の美術展」もスタートしました。今回は日本画・工芸作品の中から季節やテーマにあわせた収蔵品を紹介しており、今年の干支「辰」にちなんだ作品も展示しております。ご来館の際は、地下展示室の「鬼滅展」はもちろんのこと、2階展示室もどうぞお見逃しなく。